

砺波に生まれた器

— 庄川に伝わる挽物 —

10月17日(土)～11月22日(日)

開館時間／午前9時～午後5時

休 館／月曜・祝日及び第3日曜

会 場／砺波郷土資料館

〒939-1382 砺波市花園町1-78
TEL/0763-32-2339

主 催／砺波郷土資料館
共 催／砺波市文化協会

入館無料



江戸時代から木材の大集積地であった庄川地区、ここには暮らしを支える木工の技が伝えられています。



庄川挽物体験ワークショップ

庄川挽物で作るリース飾り ※お持ち帰りできます

日時

令和2年11月8日(日)

9時、10時、11時、13時、14時の時間制

会場

庄川水記念公園

庄川特産館 砺波市庄川町金屋1550

体験料

500円

〈申込み・お問合せ〉 0763-32-2339

砺波郷土資料館

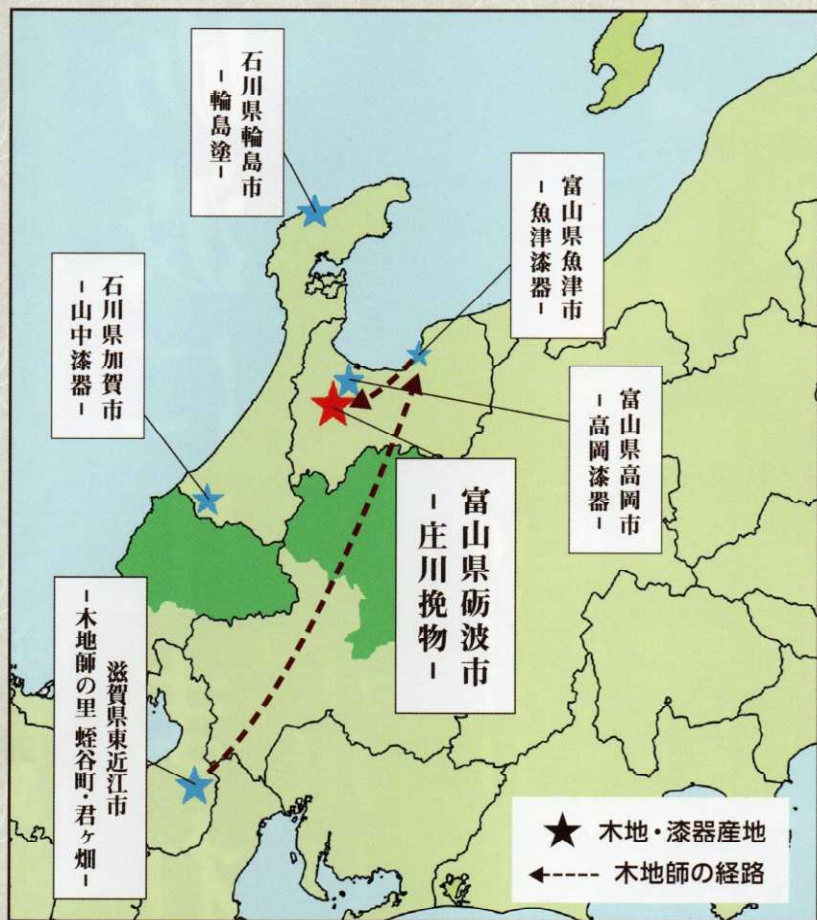


旅の軌跡-たどり着いた庄川町-

木地師 良木を求めて旅した職人たち

「挽物」とは轆轤という回転盤を使い、木材を削って作る木製品のことです。漆器の下地にもなることから「木地」とも言い、代表的なものとしてご飯や汁物を入れる木製のお椀や、食器などをのせるお盆があります。

こうした日常を支える挽物を古くから作ってきたのが、木地師と呼ばれる職人でした。木地師は轆轤と専用の鉋を巧みに使いこなし、お椀やお盆のほかに杯や湯飲みをのせる茶托など様々な挽物を作り上げ、人々の生活を支えました。



古くから木材の集積地として栄えていた庄川町は、上流部の五箇山地方や岐阜県飛騨地方から川下げされた木材を豊富に貯蔵する、木材流通の重要な拠点地でもありました。

ここ庄川町に慶応二三年（一八六六、七）年、木地師「越後屋清次（沢越清次）」が下新川郡魚津町（現在の魚津市）から移り住み、木地屋を営んだことから庄川挽物の歴史が始まります。

庄川挽物の歩み

庄川挽物のブランド化と文化の継承	時代の波に揺れ動く庄川挽物	庄川挽物の誕生	年号	できごと
平成二五年	昭和二七年	昭和十四年	慶応二三年	越後屋清次が、魚津から移住、庄川町金屋地内で挽物木地の生産を始める。
平成四年	昭和二五年	大正七年	明治三九年	斎藤和作らが弟子入りし、挽物技術が広がる。
昭和五九年	昭和二二年	昭和十四年	昭和十四年	木地工場「青島そ工株式会社」創設、十四人の職人が腕を量産する。
昭和五八年	昭和二二年	昭和十四年	昭和十四年	戦争による資材の不足、職人の招集などで生産が激減する。
昭和五三年	昭和二二年	昭和十四年	昭和十四年	海軍の軍用食器製造を開始する。
昭和五三年	昭和二二年	昭和十四年	昭和十四年	終戦により、軍用食器製造は中止され、復員した職人たちが工場を再開する。
昭和五三年	昭和二二年	昭和十四年	昭和十四年	プラスチック製品の進出で、大打撃を受ける。
昭和五三年	昭和二二年	昭和十四年	昭和十四年	輸出用サラダボールの生産を開始する。
昭和五三年	昭和二二年	昭和十四年	昭和十四年	ILO 国際労働機構の漆器生産振興に協力し、タイ国に木地師を派遣する。
昭和五三年	昭和二二年	昭和十四年	昭和十四年	原料の不足、加工工賃の高騰、円高、東南アジアの製品進出などにより、サラダボールの輸出が中止される。
昭和五三年	昭和二二年	昭和十四年	昭和十四年	通産省の「伝統的工芸材料」の指定を受ける。
昭和五三年	昭和二二年	昭和十四年	昭和十四年	第一回「庄川木工まつり」を開催する。
昭和五三年	昭和二二年	昭和十四年	昭和十四年	庄川水記念公園が完成し、「新製品開発センター」ができる。
昭和五三年	昭和二二年	昭和十四年	昭和十四年	第一回日本挽物展が開催される。
昭和五三年	昭和二二年	昭和十四年	昭和十四年	庄川木工製品が「とみなみブランド」として認定される。